

上演⑧ 富山第一高校「P.S. ぼくらのクラスは」

笑いと感動がちょうどいい感じにブレンドされている群像劇。クレジットを見ると、脚本も自分たちで、演出も出演者が兼ねており、文字通り「自分たちだけで一からつくった作品」だということがわかる。そういう意味で作品から感じた「チームワークの良さ」は今回、観た作品群の中ではベストを争うものだと思う。

舞台となる2年3組には不登校となっている鈴木という男子？生徒がいるらしい。冒頭から繰り返される学級委員長（に任命される）、平井くんのモノローグは、鈴木くんに宛てたメールの独白だ。その内容から平井くと鈴木くんのふたりは自然科学部の仲間で、サボテンの育成をテーマに活動していることがわかる。このふたりの交流を裏ストーリーとしながら、表では文化祭で発表するクラスの出し物である演劇作品『サボテン王国』の稽古を通じて、バラバラになったクラスメイトたちが再び力を合わせるまでを描いた構成となっている。そのバラバラとなる過程も無理がなく、葛藤自体も高校生たちの実態に基づいているので、最後までリアルな作品として観ることができた。いわゆるウェルメイドなつくりで登場人物たちの感情が爆発する後半は見どころのひとつでグッと引き込まれた。それはどのキャストもみんな魅力的で、かつ共感できたからこそだと思う。脚本を練り上げたゆうりとさちとその他おおぜいさん、そしてキャストの演技力に大きな拍手を送りたい。また、好みは分かれるかもしれないが、私自身は余計なBGMを使っていないシンプルな演出にも好感を持った。

今後、ブラッシュアップするとしたら前半部分における脚本の刈り込みだろう。残念ながらドラマが動き出すまでが少し長く感じてしまったことは、よくできた脚本ただけにもったいないと言わざるを得ない。そして裏の主役である鈴木くんが、どういう人物なのか、なぜ不登校になったのか、もう少し明らかにしてくれると裏と表が絡み合い、必然性が生まれ、作品に深みが増したのではないかと思う。